

愧 痕 集

山 田 茂

作風叢書42 桜桃書林

作風叢書 42

愧痕集

昭和五十年六月十日發行

著者 山田 茂

所沢市寿町二二―一
電話 0429 (22) 2465
〒359

發行者 山上 悠子
發行所 桜桃書林

熱海市水口町一八―二〇
電話 0557 (82) 2429
振替東京二六〇七〇
〒413

定価 一七〇〇円

印刷・製本・東京池袋・白馬印刷所

序

大野 誠 夫

著者の歌を見るようになってから、早くも二十余年の歳月が経過している。その間、著者は、自己の作品の世界を守りながら、しかも、その領域を少しずつ広げ、たゆみない精進を続け、本年度の「作風新賞」に選ばれるに至った。

北風の吹きしかたちに枯れし草母は忍従かさねて死にき

豪華なる春の衣裳を飾りたるウインドの下錢を乞ふ鉦

この初期（昭和三十三年）の二首は、著者の作品の性格をかなりあざやかにしている点、興味ふかい。歌風は既にこのときから定まったといってもよい。北風の向きに従って枯草が乱れ伏している、というのは、いわば序詞であり、忍従を強いられ続けて死んだ母の暗喩の役を果たしている。この苦渋の影を曳いた詠歎は、その後の二十年にわたる作品にかたちを変えてあらわれる。

また、豪華な衣裳を陳列した飾窓と、鉦を鳴らして路上に錢を乞う人との対照は、現実をそのまま手摺みにして、白日のもとに曝すことによって、作品を象徴的なものになっている。それは、言葉を換えて言うと、この世にあってはならない貧富の差を弾劾しているようだ。人間社会は、その理念の根本において、平等でなければなら

ない、という思想が、この即物的な表現の底に波打っているように思われる。

エアゾールかけ執拗に蠅を追ふ小さき不正を黙過せし夜
疲れし蟻と常に不満を持つ男といま烈日の下あゆみゆく
覚めやすく魚ら眠れる晩春に脇役ながき老優は死す
飢餓の群途切れもあらず喘ぎゆくかかる地球を青しと言ひき

けれども人間は思想だけでは生きられない。世の不正を、一々糾弾しては、身が持てない。それを黙過した夜だから、蠅を執拗に追う作者のやり場のない、澱んだ怒りが、読んでいて、じわじわ

と伝わってくる。休息することなく、食いものを運び、疲れて歩む蟻は、それを見ている著者の自画像といってもよい。この蟻によって、「不満」という散文的な言葉が詩情を帯びてくる。しかも、烈日の下である。このように著者の歌は、一層、具体的であることによって、実在感を深めようとしているように見える。また、脇役ばかりやって、たとえ、一部の識者にその芸風を高く買われようとも、主役のように華々しい喝采を得ることなく、一生を終った老優に共感を禁じ得ない著者は、何を材にしても、恵まれない人たちの側に立って歌う。しかし、「覚めやすく魚ら眠れる晩春」という環境を設定することを忘れない。この上句のために、渴いた日常詠を脱して、うるおいのある叙情となり得ていることは、注目してよい。次

の歌は、飢餓の群を現出することによって、「地球は青かった」という有名な言葉、というより美化された観念の虚しさを衝いているように思われる。どんな豪華な建物や邸宅ができて、民衆の飢えがなくならない限り、地球は美しいとは言えない。青いどころか、灰色ではないかと言っているようだ。これらの歌の思想は、また、次のような歌を生む。

保守敗れし夜拾へども拾へども銭落ちてゐる夢見て目覚む

保守が敗れた、ということとは、革新が進出したことである。その夜の夢は、拾い切れないくらい夥しい銭が路上に落ちていたという

のだ。私はこの歌を読んだとき、著者の詩情がだんだんと自由になり、おもしろくなってきたと思ったことを憶えている。

恃むべき政党もたず日もすがら碎石工場を白く描きつつ

しかし、著者は、政治の嘘にも敏感である。保守にも革新にも全くの信頼がおけないことを、詩人の直観で知る。それが、「恃むべき政党もたず」ということになるが、これこそ政治不信の危機に曝されている大方の国民の本音だろう。そこから、辿る路は、虚無か、怠惰か、頹廢か。しかし、著者はそのいずれにも身を躲すように生きている。いつのころからか、絵筆をとるようになり、二紀会理事

山口操助氏に師事し、繁忙な商業の寸暇に、油彩を勉強し、埼玉県美術協会会員でもあることを、書き添えておかねばならない。ここでは、碎石工場を終日描いたというが、この「白く」が、著者の持味の一つであろう。

ふと触れし掌は固かりきこの妻に報ゆるなくて寒に入りける

冬の庭洗ひて雨の降れる音覚めゐる妻に娘の齡を問ふ

小心に商ひくらす日々にしてゆふべ疲れし妻の目とあふ

妻と経し歳月のあと憶ふときなべては罪のごとき日々なる

妻の歌も多い。甘美なものではないが、どの作品にも深いいたわ

りの心が息づいている。「報ゆるなくて」とか「罪のごとき」などという詞句から、負目をもって生きている著者の姿も浮ぶが、著者の妻は、酒や旅を愛し、絵や歌を業余のすさびとして精進している著者をいつも暖かく見守っているようだ。

この数年来、著者の歌は、きわだって充実してきた。いつともなく、野の草の花のようなそこはかとないう風味が、作品の底からにじみでてきている。私はそれを一進境と思い、よろこびに堪えないのである。昭和五十年四月十六日記。

目次

序 大野誠夫

昭和三十一年

朝の店

昭和三十一年

白砂

昭和三十三年

母

一九

二三

二四

昭和三十四年

町の辻

昭和三十五年

子の爪

昭和三十六年

妻の掌

漁村にて

啾々

昭和三十七年

ひよこ

六

元

三
四
五

六

昭和三十八年

北 国 行

昭和三十九年

み ち の く

こ け し の 唄

昭和四十年

検 証

佐 渡

蟻

昭和四十一年

未完の絵

四〇

四八 四八

五二 五三 五三

六四

青の旅

六

昭和四十二年

冬の魚族

七

昭和四十四年

秋の波

八

昭和四十五年

白き風車

九

昭和四十六年

流人の島

一〇

昭和四十七年

失 踪

高 野

明 日 香 路

鹿のゐる森

受話器の埃

昭和四十八年

木 曾

恨 痕

春のまつり

音 楽 寺

黒 き 影

六

五

六

一〇三

一〇七

一三

二七

一三

一七

一四

昭和四十九年

夏日傷心

寺の秋

苔の花

能登

御陣乗太鼓

恋塚

時雨

鉄柱群

ポポル

昭和五十年

水子地蔵

露霜

一四〇

一五五

一五七

一六〇

一六四

一六九

一七三

一七五

一七九

一八三

一八七